保育所実習前後の就業自己イメージの変容

伊藤　智里，小河　晶子，樟本　千里
岡田　恵子

Changes in Self-image after Attaining an Occupation before and after Nursery School Practice

Chisato ITO, Akiko OGAWA, Chisato KUSUMOTO
and Keiko OKADA

キーワード：就業自己イメージ，保育所実習

概　　要

本研究は，医療保育科の学生が持つ職業意識の変容について探ることを目的とし，医療保育科１期生を対象に，保育所実習前と後に就業自己イメージ尺度を用いて比較調査を行った．独自性・競争性・自閉性・自己高揚性・拘束性・支配性・融和性の７因子の中で，独自性・自己高揚性・支配性の３因子に時期の有意差が見られた．この結果は，保育所実習を体験することで，保育士は自己実現でき，自尊感情が高められる職業であると確信し，さらに，乳幼児に対し予想していた以上に自分の指示が通るという自信につながったからであると考えられる．ゆえに，保育所実習は，保育士の仕事に対する肯定的イメージをさらに高めたといえよう．

１．緒　　言

本学科は全国初の医療保育科であり，医療機関等に勤務する保育士を目指す学生が多いという特色がある．本学科のカリキュラムには，保育所実習，施設実習，幼稚園実習に本学科特有の発達障害児実習，病棟保育実習の２種類を加えた５種類の実習が設定されており，医療や発達障害に関する知識を深められるように構成されている．本学科では，学生が初めて経験する実習が保育所実習である．医療機関等に勤務することを目指す場合にも保育士資格が基本となるので，保育所実習は５種類の中でも基盤になる実習と言える．

実習は，看護，介護，保育，教育など，対人援助を仕事にする分野には必ず設定されている．これらの分野において，実習の前後における学生の様々な変化について調査した論文は多く存在する．例えば臨地実習前後の看護技術習得状況[1]についてや，ホームヘルパー実習前後の高齢者に対する意識変化[2]，教育実習前後の教職志望度の変化[3,4]などである．

前回の筆者らの研究では，本学科は職業意識の高い学生が多いという結果が得られた[5]．その原因は，医療保育についての情報量が少ない上に，やりがい等の情報が先行し，本学科の学生が職業に対してプラスイメージでとらえているためであると考えた[5]．そのため，実習を通して現実に向かうことで職業意識が変化するのではないかと考えられる．実習経験が学生の職業意識にもたらす影響について焦点をあてた研究は見あたらない．そこで，本研究では本学科の学生の職業意識の高さが保育所実習後にどのように変化するのかということについて調査することにした．

前回用いた職業意識尺度は，自分の専門分野や職業キャリアに対する関心や思い入れの強さを見る尺度であった．従って職業意識の高低しか示されないものであった．加えて，設問が就職後の状態や行動を具体的に問う内容なので，学生には答えにくいものであった．そこで，本研究では，職業に対する意識をより詳細にみることができ，まだ就職していない学生にも回答しやすい就業自己イメージ尺度[6]を用いることにした[6]．就業自己イメージ尺度の特徴は，就業に関する多角度の要因が組み込まれている点にある．清水ら[6]が自己

（平成18年９月28日受理）
川崎医療短期大学　医療保育科
Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

就業イメージについて「就業後に自己が置かれる状況や周囲から受けるであろう影響を就業前に予期したイメージ」[6] であると述べているように，この尺度を用いることで，就業前の時点で就業後の自分についてイメージしたことを回答することができる．就業自己イメージ尺度は2005年に作成されたため，この尺度を使用した研究は未だ見あたらない．そこで本研究では，就業自己イメージが保育所実習前後でどのように変化するのかを調査することにした．

2．研究方法

1）対象及び調査方法

(1) 対象：平成18年6月21日～平成18年7月1日までの10日間保育所実習を体験した，本学医療保育科の平成17年度入学女子学生71名であった．

(2) 調査時期：実習前は平成18年6月15日に行った．実習後は平成18年7月6日に行った．

(3) 調査方法：質問紙調査方法を採用し，保育所実習前と後のそれぞれの授業終了後に集団調査を実施した．研究者が研究趣旨を説明して調査票を配布した後，自己記入を求めて回収した．アンケートの回収率は，実習前70名（98.6％），実習後70名（98.6％）であった．分析には，実習前後の両データが揃っていない者を除外した．実習前後で回収した対象者数は70名と同数だが，回収できなかった対象者が異なるため，実習前後ともアンケートを回収できた有効対象者数は69名（有効回答率97.1％）であった．

2）調査内容：質問内容は清水ら[6] が作成した就業自己イメージ尺度を使用した．この尺度は65項目からなる7件法で，独自性・競争性・自閉性・自己高揚性・拘束性・支配性・融和性の7因子構造である．

フェイス項目は①学籍番号②性別③年齢④本学卒業後の進路希望についての4項目を調査した．

3）倫理的配慮：調査への参加は自由意志であり，調査結果は統計的に処理し，個人情報保護のために厳重に保管・管理することを口頭にて説明し，調査を依頼した．

4）分析方法：Excel2002，および STATISTICA'98 Edition を使用して分析した．

3．結　　果

1）進路について

本短大卒業後，資格に関連した職種に直ちに就職する予定か否かを尋ねた対象者の進路希望を表1，2に示した．実習前後とも，「卒業後すぐに就職する」は60名（87％），「卒業後にすぐには就職しない」は9名（13％）であった(表1)．本短大卒業後，資格に関連した職種に直ちに就職することを希望している学生の割合が非常に高いことが明らかである．表1の実習前後の数値が変化していないが，実習前後においての個人内の変化についてみると(表2)，実習前の「卒業後すぐに就職する」から実習後に「卒業後にすぐには就職しない」に変化した学生が2名（0.03％），実習前の「卒業後にすぐには就職しない」から実習後に「卒業後すぐに就職する」に変化した学生が2名（0.03％）おり，合計4名（0.06％）の対象者に就職希望の変化がみられた．2名ずつの同数が変化したため，表1の数値には変化がなかった．すなわち，保育所実習は学生の就職意欲に変化を及ぼさないことを示した．

表1　実習前後における希望進路

	実習前(人)	(％)	実習後(人)	(％)
すぐ就職する	60	87.0	60	87.0
すぐ就職しない	9	13.0	9	13.0

表2　実習前後における希望進路変化

(n：69)

	(人)	(％)
変化無し	65	94.2
変化有り	4	5.8
就職する→就職しない	2	2.9
就職しない→就職する	2	2.9

2）実習前後における就業自己イメージについて

まず，独自性・競争性・自閉性・自己高揚性・拘束性・支配性・融和性の7因子の平均を示したものが表3である．分散分析の結果，交互作用が有意であった($F(6,408=8.91$，$p<0.01)$．そこで実習時期の単純主効果を分析した結果，独自性($F(1,68)=24.96$，$p<0.01)$，自己高揚性($F(1,68)=23.71$，$p<0.01)$，支配性($F(1,68)=4.28$，$p<0.05)$において，時期の有意差がみられた．すなわち，独自性，自己高揚性，支配性の3因子は，実習前に比べると実習後の方が高い得点となっていた．

次に，LSD 法における多重比較の結果を行った．就業自己イメージの単純主効果を分析した結果，実習前($F(6,408)=136$，$p<0.01)$，実習後($F(6,408)=112.3$，$p<0.01)$において有意差が見られた．実習前

表3　就業自己イメージの平均と標準偏差

	実習前		実習後	
	Mean	SD	Mean	SD
独自	4.63	0.76	4.98	0.71 **
競争	3.40	0.54	3.41	0.65
自閉	3.19	0.50	3.11	0.61
自己高揚	3.19	0.73	3.58	0.81 **
拘束	4.94	0.47	4.98	0.49
支配	3.12	0.72	3.28	0.79 *
融和	4.30	0.76	4.17	0.99

*p<0.05
**p<0.01

は，支配性＝自己高揚性＝自閉性＜競争性＜融和性＜独自性＜拘束性となった．実習後は，支配性＝自閉性＜競争性＝自己高揚性＜融和性＜独自性＝拘束性となった．従って，実習前は低い順位で自閉性・自己高揚性・支配性が同位だったが，実習後はこれら3因子の中では自己高揚性が高くなり，競争性と同位になった．また，実習前は拘束性が一番高かったが，実習後は拘束性に独自性が並んだ．

4．考　　察

本研究の目的は，本学医療保育科の学生が持つ，自分が就職した後のイメージが保育所実習後にどう変化するかを調査することであった．

本調査により，2点のことがわかった．1点目は，今回の保育所実習は，学生のもつ希望進路に変化を与えなかったことである．2点目は，保育所実習が就業自己イメージに変化をもたらしたことである．具体的に見ていくと1点目は，本学科の学生は実習前から資格に関連した仕事に就きたいという思いを強く持った者が大半であることであった．そして現実を知ることがその思いを変えることはなかった．2点目の就業自己イメージが変化したことに関する特徴は2つあった．特徴の1つめは，実習の前と後を通して拘束性・独自性・融和性の3因子は，数値が高く，3因子内の順位に入れ替わりはなかった．この特徴のあった3因子に着目し，それぞれ見ていくことにする．まず独自性とは，他者を意識して独自な自分を示すものであり[7]「仕事を通して他の人とは違う自分を表現できたり，自分の特徴が打ち出せるなど，独自な自分を表現できるイメージ」[6]を中心としたものである．清水らは，「独自性は職業希望の強さに正の影響を及ぼす」と述べている[6]．このことは，本学医療保育科の学生の独自性が高いということと，早く職に就きたいという学生が多いことと一致する．さらに，本学科には職業意識の高い学生が多く，職業意識が高い学生ほど自己実現の達成動機が高く，情報を多く取り入れて専門選択を行っていることが見いだされている[5]ことと一致する．つぎに拘束性とは，仕事上において様々な行動が求められる内容のことであり[7]，すなわち人間関係と職務上の協調性，上下関係の配慮の必要性を感じているものであると考えることができる．拘束性が高い数値にあることは，学生が保育士について，職業規範や，常に行動の適切性などを求められる職業であるというイメージを実習前から持っていたことを示していると考えられる．最後に融和性とは，仕事上の人間関係でも友人や仲間のように親密なものにできる可能性ということで[7]，すなわち人に対して受容的であることや仲間意識があるというイメージであると考えることができる．融和性が高いということは，保育士同士が連携して乳幼児の保育にあたることの大切さを感じているといえる．従って，実習以前から，多くの学生が保育士の仕事に関して，自信を持って仕事に熱中できる，周りの人と協同することが求められ，仕事上では誰とでも友好的でいられそうなどのイメージを持っていたことがわかる．拘束性・独自性・融和性は，今回の保育所実習において大きな変化はなかった．

特徴の2つめは，実習前後で，独自性・自己高揚性・支配性の3因子に有意差があり，それぞれ得点が実習後に高くなっていることである．これら3因子別に見ていく．まず独自性について見てみると，学生は実習を体験することで，よりやりがいを見いだし，仕事に熱中でき，積極的に自信を持って職務をこなせそうだと感じていることがうかがえる．すなわち，保育士は自己実現できる職業だということを確認してきた可能性があると考えられる．次に自己高揚性について見る．自己高揚性とは，他者からほめられたり，尊敬されたりするなどして自己を高揚できるという内容である[7]．すなわち，他者からポジティブな反応を向けられる，保育士の仕事は自尊感情が高められる職業だという思いを強くしたことがうかがえる．保育所実習中に実際に乳幼児に慕われたり，関心の的になったり，楽しい時間を過ごせたという経験が保育士になることへのイメージをさらに肯定的にしたと考えられる．最後に支配性について見る．支配性とは，他者への影響力の強さをその内容としており[7]，実習中に乳幼児に対し予想していた以上に自分の指示が通るという経験をしたことがうかがわれる．自分の指示が通るという

経験は，乳幼児と接することへの自信につながったと考えられる．独自性，自己高揚性，支配性の高まりの変化から，実習に参加し保育者の役割を体験することで，多くの学生は自信と自尊心を持ってリーダーシップを発揮していくことができる仕事であるというイメージを高めたことがわかる．

今回の結果を見ると，独自性は実習前から高い数値であったが，実習後に拘束性と並び最も高い数値を示した．さらに，自閉性・競争性は低い数値を示している．清水ら[6]は，職業希望の強さに対し独自性は正の影響を与え，自閉性・競争性が負の影響を与えると述べている．このことからも学生の職業希望が高いことと，保育所実習を経験したことが就業自己イメージに良い影響を与えたことがわかる．7因子の順位には大きな変化がなかったことから，実習の前後では，保育所で働く自分のイメージは変わらなかったといえる．その理由として，第一に，保育士は一般的に目にしたり，自らが幼少時に通っていた経験があったりして，保育士のイメージを実情に近い形ですでに持っていたと考えられた．

本学科は，保育所実習の後に，施設実習，幼稚園実習，発達障害児実習，病棟保育実習が設定されている．それぞれ実習機関において異なる性質の実習を体験することになるので，就業自己イメージはさらに変化することが予測される．特に発達障害児実習や病棟保育実習は前例がないため，実情とは遠いイメージを持っていたり，イメージができていない可能性がある．それぞれの実習を体験することによって学生の就業自己イメージがどう変容するかを把握することが今後の課題である．

5．文　　献

1）吉村洋子，笠井恭子，寺島喜代子：臨地実習前後における看護技術習得状況，福井県立大学論集23：131—142，2004.

2）一宮女子短期大学生活クリエート部門：ホームヘルパー実習前後の高齢者に対する意識変化，一宮女子短期大学研究報告40：63—73，2001.

3）方川　淳，太田正清：教育実習生の実習前から実習後への教職志望意識の変化に関する調査 — 教職志望高グループと低グループとの比較 —，ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品・栄養学編24(1)：140—151，2000.

4）紅林伸幸，川村　光：教育実習への縦断的アプローチ — 大学生の教職志望と教師化に関する調査研究(2) —，滋賀大学教育学部紀要教育科学51：77—92，2001.

5）小河晶子，樟本千里，岡田恵子，鎌野智里：新入短大生の職業意識と専門選択の動機に関する研究 — 第一看護科，介護福祉科，医療保育科の比較を通して —，川崎医療短期大学紀要25：51—56，2005.

6）清水　裕，下斗米淳，風間文明：大学生の就業自己イメージ尺度作成の試み，社会心理学研究20(3)：191—200，2005.

7）清水　裕，下斗米淳，風間文明：大学生の就業自己イメージの構造，昭和女子大学生活心理研究所紀要5：1—12，2002.